

Sirīmaṅgala-paritta-pāḷi について

古 山 健 一

1. はじめに

本稿は、ミャンマー連邦の初代首相ウー・ヌ (ဦးနု, A.D.1907-1995) らがヤンゴンに設立した護呪聖典協会(※後述)によって編纂された護呪経集成本である *Sirīmaṅgala-paritta-pāḷi* ⁽¹⁾ (以下 *SParit* とする) について論ずるものである。

ここでは先ず、編纂経緯と輯録護呪経の仔細を述べる。これらについては、既に池田正隆によって紹介されている [池田 1972a. pp.139-143 ; 池田 1997. p.167] が、本稿ではいま少し詳しく述べたい。次いで、*SParit* に輯録されている「疑経」の護呪経について若干の考察を加える。*SParit* には計 31 の護呪経が輯録されているが、そのうちの *Chadisāpāla-sutta*、*Cakkaparitta-sutta*、*Parimittajāla-sutta*、*Uppātasanti* については、Peter Skilling が “*apocryphal suttas*” であると述べている [Skilling 1992. p.120]。

なお、ここでは、*SParit* のテキストとして、ミャンマー宗教省刊行のミャンマー文字活字本 (2011 年刊の複写版) を使用する ⁽²⁾。本稿においてたんに *SParit* と言う場合はこの複写版を指し、これ以外の同種同類の集成本について述べる場合は、如何なる版であるかを逐一断ることにする。

本稿には不十分な点多々あるが、これを以て、我邦においては従来余り注目されてこなかったと言えるミャンマーの護呪経テキストの研究に、聊かながらも寄与し得るところがあれば幸いである。

2. 編纂経緯について

SParit の原初版、即ちミャンマー宗教省刊行本の原稿となった護呪経集成本は、「ティーリミンガラ護呪聖典協会」(ထီရိမိန်ဂလာ ပရိတ်တော်အဖွဲ့ ⁽³⁾) なる仏教団体によって編まれたものである。

「ティーリミンガラ護呪聖典協会」とは、*SParit* の「因縁 (၄၁၆၁)」によると、コーザー暦⁽⁴⁾ 1312 (A.D.1950) 年の第 2 ワンゾー月⁽⁵⁾ に、当時の首相であったウー・ヌ (※ A.D.1948 年 1 月 4 日から A.D.1956 年 6 月 12 日まで初代首相) の家で、ヒンタダ (※現エーヤーワディー管区ヒンタダ県の河港都市) のウー・ミヤ (၉၈၆)、宗務大臣ウー・ウィン (၉၁၀၆၁) らが発起人となって協議し、設立されたとのことである [*SParit* p.ṇa]。

ただし、池田正隆は、A.D.1949 年に *The Thudhammawadī Press* から出版された *Thīrimaṅgalā Paritdaw* (以下 ThP 版とする) を解題する文章において、〈この書物は、出版の前年 1948 年にヘンザダ町のウー・ミヤをはじめ、当時の首相ウー・ヌーなど僧侶以外の在家仏教界の要人 10 名が発起人となって、Thīrimaṅgalā Paritdaw Apwe なる組織をつくり、…〉[池田 1972a. pp.139-140] と述べている。池田はこの刊本をミャンマーから持ち帰って所有していた [池田 1972a. p.135] ので、氏の解題はこの ThP 版 (※古山は未見) に書いてあったことであろう。その版本は A.D.1949 年に刊行されているわけであるから矛盾が生じる。*SParit* の「因縁」において、何故に協会設立時期が「コーザー暦 1312 年」と書かれたのか謎である。ここには何らかの誤解や錯綜が含まれているのではなかろうか。今はひとまず、池田の解題を信頼し、協会設立は A.D.1948 年、護呪経集成本の刊行は A.D.1949 年と見ておきたい。

本稿で用いている宗教省刊の *SParit* は、国家仏教評議会が刊行した「第 3 版」(၁၀၀၅၁၁၁၁) の複写版である。「第 3 版」とは、第 6 回仏典結集に参加した阿闍梨比丘らが修訂の手を入れたものとのことである [*SParit* p.jha]。第 1 版と第 2 版が何を指すのかは「因縁」において詳らかでないが、第 1 版は A.D.1949 年の ThP 版なのかもしれない⁽⁶⁾。池田によれば、A.D.1951 年刊の同社版もあるようである [cf. 池田 1993. p.39]。

なお、宗教省版との語句の異同については、筆者は ThP 版を未見のため詳らかでないが、池田 1972b. の註における、A.D.1968 年刊の *Buddhasāsana Council* (国家仏教評議会) 版 (※これは「第 4 版」に当たる [cf. 池田 1993. p.39]) と ThP 版の比較結果から、ごく僅かであるが、これを知ることが出来る。

また、輯録されている 31 経の並べ順 (配列) については、ThP 版と宗教省版との間に相違があるようである。池田が示す並べ順 [池田 1972a. pp.140-141] を見て比較すると、ThP 版では No.20 ~ No.22 として配置されていた *Chadisāpālasutta*、*Cakkaparitta-s°*、*Parimittajāla-s°* と No.24 とされた *Uppātasanti* が、宗教省版では No.28 ~ No.31 となり、末部の方へ移動しているようである。その理由

は目下のところよく分からないが、これら 4 経がパーリ三蔵に典拠を持たない、いわゆる “non-canonical texts” に類することと関係しているのかもしれない。ThP 版から宗教省版への移行の際の変化に関しては後考に俟ちたい。

ティーリミンガラー護呪聖典協会であるが、設立の発起人となったのは、SParit の「因縁」によれば、ウー・ミャ [※会長]、ウー・ヌ、宗務大臣ウー・ウイン、セインプラザー社のウー・タウンセイ (ဦးထွန်းစိန်) [※幹事]、宗務局長ウー・ヂーペー (ဦးမြင့်ဓမ္မ)、大学教授ウー・タンシン (ဦးထန်းဝင်း)、宗教省官吏ウー・ニュンマウン (ဦးညွန့်ဓမ္မဝင်း)、宗教省官吏ウー・キンマウンリン (ဦးခင်မောင်လင်း)、教法講師ウー・ニュンスウェ (ဦးညွန့်ဓမ္မ)、教法講師ウー・ソーウイン (ဦးစိုးဝင်း) の、計 10 人の「俗人御大」(၇၃၆၆၆) である [SParit p. na] ⁽⁷⁾。

会長となった「ヒンタダのウー・ミャ」とは、独立前からの政治活動家であり、当初はウー・ソウ (ဦးဓမ္မ) の設立したミョーチツ党 (ဗိုလ်ချုပ်ပါတီ: 愛国党) に参画して、後に反ファシスト人民自由連盟 (AFPFL) に移り、AFPFL の最高評議会委員となった、ビルマ族の有力政治家である [Cf. Kyaw Zaw Win.]。

この協会の目的は、同じく SParit の「因縁」によると、次の如くある。

刀兵災 (ဝတ္ထုန္တရကပ္ပံ < P.sattha-antara-kappa)、疾疫災 (ရောဂါန္တရကပ္ပံ < P.roga-antara-kappa)、飢饉災 (ဒုဗ္ဘိန္တရကပ္ပံ < P.dubbhikkha-antara-kappa) という、様々なる大悪災、厄災、災難、様々な危険、悲惨なる様ざまな困苦に直面し遭遇し被っている国民たちと、世界の人々、多くの生きものを憐れむべく、悲心 (ကရုဏာ < P.karuṇā) に基づき、悪しき厄災、悪しき災難、悪しき危難、悲惨なる悪しき困苦をきれいさっぱり雲散霧消して幸福を享受することのできる種々の吉祥 (ဗုဒ္ဓိပုဏ္ဏား < P.maṅgala) を、十分にそなえることを展望し切望する。最勝なる正しき意欲として、ミャンマー連邦内の管区、県、市、村、各々の地域において、護呪聖典協会を分けて設立し、常に途絶えることなく、読誦し唱和することを実現する。[SParit pp.na-ca ※原文はミャンマー語]

ミャンマーがイギリスの植民地支配から独立した A.D.1948 年に、初代首相ウー・ヌらは、恐らくは当時の国家・社会に切迫していた問題を危惧してのことかと思われるが、「悲心」(拔苦の念)に根差して、刀兵災・疾疫災・飢饉災の所謂「三災」⁽⁸⁾を被っているミャンマー国民らに、厄災拔除を可能にする「吉祥」をそなえることを望んだ。つまり、護呪経読誦によって人々に「吉祥」をそなえさせ、その呪的な力で「三災」から救済しようとした。そして、その護呪経読誦を勧奨するために設立されたのがティーリミンガラー護呪聖典

協会であった。「三災」という仏教語は末世的状況を指すものであるが、護呪聖典協会の発起人らの眼には、A.D.1948-49年頃の国内の様相が末世の如くに映じていたのであろう。

その大きな理由として、少数民族が反政府武装闘争を本格化させ内戦が勃発したことが指摘出来るのではないかと思う。Donald Eugene Smith は、〈…1948年7月までに、国は反乱の圧力で崩壊しつつあるかの如き様相を呈した。この脅威に立ち向かうべく、首相は、仏像の前に跪坐し、既婚の人ではあったが、今日より命終に至るまで禁欲生活を送るとの謹厳な誓願を立て、そして、その誓願の功德によって反乱軍の虞が消えるように祈った〉[Smith1965. p.142] と述べている。A.D.1948年終わり頃から翌49年の初めまで、カレン族との武力衝突は熾烈を極めた [cf. 大野 1969.]。ウー・ヌらの眼前には、斯様な「刀兵災」による国家的危機の現実があった。

また、独立直後には、反英独立運動の時期以来の「末法観」が残っていたと言う [cf. 土佐 2000. pp.241-242]。この協会の発起人として名を連ねる、かつて反英独立運動に参画したウー・ヌやウー・ミャらに斯様な「末法観」の余波があり、潜在意識的に末世的な世相観を懐かしめていたとも考えられよう。

この協会が編んだ、後に *SParit* となる *Sirīmaṅgala-paritta-pāḷi* とは、「吉祥」をそなえることが出来、「三災」除滅の効用のある護呪経として選ばれたものの輯録である。可成踏み込んだ言い方をすれば、少なくともこれが最初に編まれた際の意識としては、国家安康のための護呪経を集めたものとも言えるだろう。

SParit の「因縁」によれば、釈尊御説法の三蔵の中には護呪経の説示がふんだんに存在しており、仏典結集を行った大阿羅漢たちや、三蔵に通暁している賢明なる大阿闍梨たちは、代々、読誦し唱和してきており、効能・威力が大きい、という。そして、効能・威力が大きいものとしてよく知られている諸々の護呪経だけを抜き出して、寄せ集めた。それが *SParit* に輯録することとなった31経であるとする⁽⁹⁾ [*SParit* p.ca.]。

SParit の護呪経は三蔵から抜き出したものであると述べているが、冒頭で述べた如く、*SParit* には、31経のうちの4経ではあるが、“*apocryphal suttas*”と評される護呪経も含まれている。*SParit* は、編集当時までにおいてミャンマーで大霊験のあるものとして知られていた護呪経の集成であって、その全てがパーリ三蔵に典拠を持つ訳ではなく、後代にどこかで作成された護呪経類も輯録されている、とするのが実際のところである。そのことを承知の上で、輯録

31 經のすべてを三蔵から抜き出したものと護呪聖典協会が主張するのであれば、これは疑經の正典化と見做すことが出来るであろう。

護呪聖典協会とは、首相ウー・ヌや宗教省の大臣・高官らが発起人となって設立された団体であるから、その場合、これは一種の世俗権力による正典化ということになる。宗教省版に移行した後でも、“*apocryphal suttas*” は除外されず、そのまま維持されたが、この場合は、政府による正典化と評価することが出来るであろう。

3. *SParit* の構成

SParit は計 52 の事項 (အကြောင်းအရာ) から成っている。これらを大別すると、(1)～(12) が序編、(13)～(47) が本編、(48)～(52) が附録に、各々相当する。

先ず序編であるが、その詳細を示すと以下の如くである。なお、各々の注記における“P”はパーリ語、“M”はミャンマー語 (※パーリ・ミャンマー混淆も含む) を表す。

- (1) 「因縁」 (pp.nā-jha [M]) ⁽¹⁰⁾
- (2) 「ナツの招請」 (နတ်ဝဋ်, pp.nā-tha。善神招請の 2 文 [P] と語釈 [M]) ⁽¹¹⁾
- (3) 「邪靈遮止の諸偈」 (စည်းချက်ကိလ္လိယာ၊ pp.tha-dha。邪靈遮止の 11 偈 [P]) ⁽¹²⁾
- (4) 「仏の Anekajāti 文」 (ဘုရားအနောက်ဇာတိဝိသိ၊ p.dha。仏灌頂の 2 偈 [P])
- (5) 「順縁起」 (ပဋိစ္စသမုပ္ပါဒ် အနုလောမ, p.na [P])
- (6) 「逆縁起」 (ပဋိစ္စသမုပ္ပါဒ် ပဋိလောမ, p.na [P])
- (7) 「感興偈 3 偈」 (ဥဒါန်းဂါထာ ၃-ပုဒ်, pp.na-ta [P])
- (8) 「仏の御徳 9 種聖文」 (ဘုရားဂုဏ်တော် ကိုးပါး ဝိဋ္ဌိ, p.ta [P])
- (9) 「ナツ・龍・金翅鳥・梵天灌頂偈 4 句」 (နတ်, နဂါး, ဝဠာ, ဗြဟ္မာတို့၏ အဘိ -
-သေတ ဂါထာ ၄-ပုဒ်, p.ta [P])
- (10) 「発趣の縁略説文」 (ပဌာနပစ္စယုဒ္ဓေသ-ဝိသိ, p.tha [P])
- (11) 「“Jayanto” 偈で始まり “saha sabbhehi nātibhi” で終わる諸偈」
("ယေန္တော" ဂါထာမှ စ၍ "သဟ သဗ္ဗေဟိ ဉာတိတိ" အဆုံးရှိသော ဂါထာများ, p.tha [P]) ⁽¹³⁾
- (12) 「大地勝利真言 14 偈文」 (ပထဝီယေမန္တန် ဘုရား-ဂါထာဝိသိ, pp.da-ba。大地勝利真言 14
偈 [P] と語釈 [M]) ⁽¹⁴⁾

この序編の中で示されている各種の偈文等もまた、広義の護呪経類と言えるが、これらは“paritta”の読誦を伴う勤行や儀礼の際に唱えられる付随的なものである。例えば、仏像の開眼供養の際には、(4)、(5)、(6)、(7)、(10)(38)、(39)が唱えられると言う [cf. ウェーブツラ 1978. pp.180-197] ⁽¹⁵⁾。

各偈文等の三蔵等における出典が *SParit* の脚註に示されており、これを見るに、多くは三蔵から抄出されたものであることが分かるのであるが、善神招請の文や邪霊遮止の偈、“Jayanto”偈で始まり“saha sabbehi nātibhi”で終わる諸偈の前2偈、大地勝利真言は、そのままの文言を三蔵に見出すことは出来ない。

“Jayanto”偈で始まり“saha sabbehi nātibhi”で終わる諸偈は、本編にある (24) Pubbaṅha-sutta の vv.15-19 に一致する。この Pubbaṅha-s[°] と共通する部分の多い [Mahā-] Jayamaṅgala-gāthā と呼ばれるパーリの護呪文の中にも、一致する偈が含まれている。

大地勝利真言については、*SParit* において、〈昔の阿闍梨たちによって書かれた偈〉(p.da) との註記がなされている。その文章・内容について、*Mahādibbamanta* との類似を指摘することが出来る ⁽¹⁶⁾。

次に本編であるが、初めに「ティーリミンガラー・パイエッドー」等の題書と仏礼拝文 (namo tassa...) があり、以下に護呪経 31 種ほかを示している。(47) の末部には「ティーリミンガラー・パイエッドー終わる」とある。故に、この (13)~(47) が *SParit* の本体と見るべきであろう。

本編は以下の如くである。

(13)Paritta-parikamma (pp.1-2, vv.1-9 [P])

(14)Maṅgala-sutta (No.1, pp.3-4, vv.10-14 [P])

(15)Ratana-s[°] (No.2, pp.5-9, vv.15-45 [P])

(16)Metta-s[°] (No.3, pp.9-11, vv.46-57 [P])

(17)Khandha-s[°] (No.4, pp.11-12, vv.58-65 [P])

(18)Mora-s[°] (No.5, pp.13-14, vv.66-71 [P])

(19)Vaṭṭa-s[°] (No.6, pp.14-15, vv.72-77 [P])

(20)Dhajagga-s[°] (No.7, pp.15-19, vv.78-101 [P])

(21)Āṭānāṭiya-s[°] (No.8, pp.19-22, vv.102-131 [P])

(22)Aṅgulimāla-s[°] (No.9, pp.22-23, vv.132-134 [P])

(23)Bojjhaṅga-s[°] (No.10, pp.23-24, vv.135-145 [P])

- (24)Pubbaṅha-s ° (No.11, pp.24-27, vv.146-164 [P])
- (25)Mahāsamaya-s ° (No.12, pp.28-37 [P])
- (26)Sammāparibbājanīya-s ° (No.13, pp.38-40 [P])
- (27)Purābheda-s ° (No.14, pp.41-42 [P])
- (28)Kalahavivāda-s ° (No.15, pp.43-45 [P])
- (29)Cūḷabyūha-s ° (No.16, pp.46-49 [P])
- (30)Mahābyūha-s ° (No.17, pp.50-53 [P])
- (31)Tuvattaka-s ° (No.18, pp.54-57 [P])
- (32)Mahā-āṭṭhānīya-s ° (No.19, pp.58-78 [P])
- (33)Abhiṇha-s ° (No.20, pp.79-83 [P])
- (34)Dhammacakkappavattana-s ° (No.21, pp.84-89 [P])
- (35)Anattalakkhaṇa-s ° (No.22, pp.90-93 [P])
- (36)Dhammapada-pāḷi (No.23, pp.94-145 [P])
- (37)Mahāsatipaṭṭhāna-sutta (No.24, pp.146-172 [P])
- (38)Paṭṭhāna-pāḷi Paccaya-uddesa (No.25, p.173 [P])
- (39)Paṭṭhāna-pāḷi Paccaya-niddesa (No.26, pp.173-184 [P])
- (40)Brahmajāla-sutta (No.27, pp.185-241 [P])
- (41)Chadīsāpāla-s ° (No.28, pp.241-244 [P])
- (42)Cakkaparitta-s ° (No.29, pp.245-246 [P])
- (43)Parimittajāla-s ° (No.30, p.247 [P])
- (44)Uppātasanti (No.31, pp.248-277 [P])
- (45)Uppātasanti のミャンマー語翻訳 (မုဒ္ဒိကောဝုဒ္ဓိ, pp.279-333 [M])
- (46)「慈送持・祈願・ナツ送持・功德廻向」(မေတ္တာပို့ချောမွေ့ခြင်း၊နိဗ္ဗာန်၊အမျှဝေ, pp.335-337, 4 偈 [P] とミャンマー語訳 [M])
- (47)「政府公告」(အစီရင်ခံစာ၊နိဗ္ဗာန်၊ pp.339-344 [M])

これらのうち、(13)は、“samantā cakkavāḷesu”で始まる9偈で、“paritta”読誦の前に唱えられるものである。神々を“paritta”読誦の場に招請して、神々に聞法を勧めるための誦唱文である。

(14)～(24)は、いわゆる“Mahāparitta”(大護呪、ミャンマー語でမဟာပရိတ်)の11経に相当する部分である。(24)Pubbaṅha-s °が終わった後には、〈護呪聖典終わる〉(parittapāḷi niṭṭhitā)との文言が置かれている。この11経を“Mahāparitta”と括る考え方は、

A.D.17c 前半期よりも後に成立したものと推定される [cf. 古山 2014.]。

(25)~(44) は、“Mahāparitta” 以外の護呪經ということになる。冒頭でも述べた如く、このうちの (41)Chadisāpāla-s^o (六方守護經)、(42)Cakkaparitta-s^o (輪護呪經)、(43)Parimittajāla-s^o (全友網經?)、(44)Uppātasanti (凶事寂滅) の 4 經典は、Peter Skilling が “*apocryphal suttas*” と評するものである。このことは次節において述べる。

この 4 經以外の護呪經については、ほぼ大半が三藏中に見出される。ここでは、その出典の一々を示して異同等の指摘をすることはせず、SParit の脚註のほか、池田正隆の調査 [池田 1972a. pp.140-141]、ウェーブツラ 1978. の本篇及び付録の各々に付された「註」から知ることが出来ることのみを述べて、ひとまずこれに代えておきたい。

なお、池田の調査 [池田 1972. p.142] では、(33)Abhiṇṇha-sutta について、その典拠をつきとめることが出来なかったとのことであるが、SParit の脚注を見ると、*Aṅguttara-nikāya* の Abhiṇṇhapaccavekkhitabbathāna-sutta [Pañcakanipāṭa-pāḷi B^o pp.62-66] に対応するとある (p.79)。故に、これは、三藏から抜粋されて護呪經に仕立てられたものということになり、典拠不詳でも疑經でもない。

(46) には、パーリ語による 4 つの偈文が示されている。うち前 3 偈 (vv.ka-ga) は Pubbaṇḥa-sutta の vv.4-6 と同一であるが、4 つ目の功德廻向偈 (v.gha) ⁽¹⁷⁾ は三藏と註釈文献には典拠を求めることが出来ない。

最後に、附録は以下の如くである。

(48)Abhiṇṇha- s^o の nissaya ((33) の逐語訳、pp.345-346 [M])

(49)Anattalakkhaṇa- s^o の nissaya ((35) の逐語訳、pp.357-364 [M])

(50)Parimittajāla- s^o の nissaya ((43) の逐語訳、pp.365-367 [M])

(51)Dhāraṇa-paritta (pp.368-369 [P])

(52)Dhāraṇa-paritta の nissaya (pp.370-376 [M])

附録に収載されている Dhāraṇa-paritta であるが、ミャンマーにおいて仏塔境内や市中の書肆等で売られている小型の經本冊子に、しばしば収載されている。ミャンマーではよく知られたものである。これも Peter Skilling は “*apocryphal suttas*” に分類している [Skilling 1992. p.123]。

4. 「疑経」護呪経について

Peter Skilling は、パーリには数多くの散文・偈文の “non-canonical texts” たる護呪経があるとし、それらを① “apocryphal suttas” と② “gāthā and other texts” の2種に分類している。①は、“evaṃ me sutam” という定型句で始まるものであり、②は「仏語」(buddha-vacana) であることを主張しないもので歴史上の作者を持つと認められるものである、と述べている。そして、SParit に輯録されている護呪経については、既述の如く、本編の4経と附録の1経の計5経について、“apocryphal suttas” に分類している [cf. Skilling 1992. pp.122-124]。

筆者(古山)は、SParit の本編に輯録されている諸々の護呪経のうち、その文言の半分以上がパーリ三蔵に何らの典拠も持たない完全な創作文でありながら、“evaṃ me sutam. ekaṃ samayaṃ bhagavā...” という、所謂「序分」を付して、釈尊所説としての経であることを示す体裁をとり、かつ“sutta”と題しているものを「疑経」と呼ぶことにしたい。SParit の本編輯録31経のうち、筆者の定義において当面「疑経」と呼んで差し支えないのは、Chadisāpāla-sutta、Cakkaparitta-s[°]、Parimittajāla-s[°] の3経のみである⁽¹⁸⁾。

Peter Skilling が①に分類する Uppātasanti であるが、これは②に分類されるべきものであると考える。その理由は、Sāsanavaṃsa に、〈…そこ(※ヨーナカ王国)では、都において、とある長老が Uppātasanti を [つくった]。伝え言うには、その Uppātasanti を読誦して、チーナ王(※中国の王)の軍隊を打ち負かした…〉[PTS p.51; cf. 生野 1980. p.110] との記述があることによる。Sāsanavaṃsa の下地となった『ターダナーリンガーヤ・サーダン』(သုတေသနစာအုပ်တစ်အုပ်) のほうにも、〈Uppātasanti をジンメ(※チエンマイ)の阿闍梨たちがつくった。その文章を唱え読誦したので、中国の包圍攻撃が失敗したことがあるという言い伝えがある〉[မောင်မောင် ၁၉၆၅ 1956. p.78; cf. 池田 2007. p.125. ※原文はミャンマー語] とある。この両書によれば、Uppātasanti は、ラーン・ナー王国のチエンマイにおいて長老比丘によって創作された “non-canonical text” ということになる。撰述時期は両書に明記されていないが A.D.16c 頃の作か?⁽¹⁹⁾

池田正隆は、A.D.1993 年に Uppātasanti のテキストのローマナイズと邦訳を公表している [池田 1993.] が、その解説の中で、ミャンマーの Tilokasāra 比丘による論稿に基づいて、A.D.1405 年にジンメ(※チエンマイ)の国王ソービャータン (Sophyāsān) が敵軍に包圍された時に、Mahāsīlavāṃsa という名の長老比丘が Uppātasanti を読誦させると敵軍が退却したという話と、インワ王朝のミンガウ

ン 2 世王治世期 (A.D.1479-1501) に Uppātasanti が唱えられていたことを紹介している [池田 1993, pp.39-40; p.43 註 38 ~ 40]。その史実性の検証が必要であるが、ひとまずこれは措いて、この話を信頼すれば、Uppātasanti は、A.D.15c 初頭頃までにラーン・ナー地域で撰述されていたということになる。また、A.D.15c 終わり頃にはミャンマーに伝わり、少なくともミャンマーでは、敵軍降伏の故事が語られ、戦勝祈願の護呪経と見做された。

筆者の見聞では、タイ北部においてもこの護呪経は知られており読誦も行われている。現地語で「マハーサンティンルアン」(มหาสันติหลวง) と呼ばれており、その作者については、チエンマイのチョーティカーラーム寺 (วัดโชติการาม) の Mahāsīlavamsa (あるいは Mahāmaṅgalasīlavamsa) 師であると聞かされたことがある。

以上の事を勘案すると、Uppātasanti については、ただ単に、後世にパーリ語で著された “non-canonical texts” の 1 つと位置付けておけば良いということになるであろう。少なくとも SPari に輯録の同護呪経においては、その冒頭部分に「序分」が書かれてはいない。仏説としての経であることを示す体裁をとっていないのである。また、その題名には “sutta” の語が付されていない。

タイ字の活字テキストを見ても、題名に「御偈文」を意味する “พระคาถา” の語が前接されていることはあっても、“sutta” に相当する語を後接したものは見たことがない。

因みに、ラオス国立博物館 (National Library of Laos) の The Digital Library of Lao Manuscripts (<http://www.laomanuscripts.net/en/index>) で所蔵写本を検索してみると、ラオ・タム文字による Uppātasanti の貝葉写本が 10 本見つかる。A.D.19-20c 頃に筆写された写本である。それらのうち、筆者が見た限り、題名に “-pakaraṇam” の語を後接する写本はあっても、“-suttam” とするものはないようである (余談であるが、Uppātasanti と Mahāḍibbamanta がセットで筆写されている写本が 1 本あった)。

こうしたことから、Uppātasanti を “apocryphal sutta” に位置付けるのには難があり、筆者の定義における「疑経」に分類することも無理である。Peter Skilling の分類法によれば、これは②とするのが相応であろう。

一応、附録にある Dhāraṇa-paritta についても、ここで付言しておきたい。

この護呪経は 4 区切りのパーリ語散文から成る。“taṃ dhāraṇaparittam yathā katamam” 云々の、この護呪経の功德を語る終段部は、三蔵等に典拠を見出すことの出来ない創作文である。ここにはドラヴィダ語起源と思しき “illi milli tilli milli” なる真言⁽²⁰⁾ も含まれている。また、ここでは、その功德を釈尊が

Ānanda 尊者に語った体裁をとっており、この Dhāraṇa-paritta を 7 億 7000 万及び 9 億 9000 万の正自覚者たちが説いた、とも述べている。この護呪經の初めには “evaṃ me sutam” 云々の「序分」はないが、それによって仏の所説のかたちになっているのである。この終段部だけを見ると「疑經」の範疇に括りたくなるが、前の 3 段分は、若干の独自の文言が挿入されてはいるものの、パーリ三藏及び註釈文献にある文言のパッチワークであり⁽²¹⁾、パーリ三藏に一定の典拠を有している。全体は確かに “non-canonical text” や “extra-canonical literature” の類と見做すべきであるが、“apocryphal sutta” とまでは言えないように思う。

話を戻すと、それでは、上述した本編輯録の 3 つの「疑經」護呪經とは、如何なるものか。

先ず、これら 3 經は、題名に “sutta” の語が入っており、“evaṃ me sutam” 以下の「序分」があり、比丘に対する釈尊の説示である体裁が取られている。Cakkaparitta-sutta については、最後の部分に “evaṃ bhagavatā bhāsitaṃ āyasmā ānando abhinandi” との文言まで入っている。本文中の一々の文章について、パーリ三藏に一致するものが見出されない。筆者が「疑經」として括る所以はこれらの諸点にある。

ただし、上述の Uppātasanti と、以下にその内容の概略を述べる 3 つの「疑經」は、刀兵災の除滅を願う者にとっては恰好の護呪經と言える。

Chadisāpāla-s^o は、東・南・西・北・下・上の各々に居る、三宝恭敬の善神である「大夜叉」(mahāyakkha) たちに加護を願う護呪經である。所謂「方位守護」のための護呪である。經題の “chadisā-pāla” は「六方の守護」とも「六方の守護神」とも訳せる。

Cakkaparitta-s^o は、釈尊が成道の際に獲得した法輪 (dhamma-cakka) の威力による厄災除去を祈願する護呪經である。先ず、四方四維上下の十方に現れる怨敵による恐怖を碎破することを願う (方位守護)。次いで、法輪の威力によって、あらゆる場所において比丘・比丘尼、男女の信徒、男女の資産家、男女の奴隸、男女の庶民、男女の婆羅門、国王・王妃、副王・副王の妃、大臣・大臣の妻などが、無悶・無瞋・無怨・無病となり、互いに愛し合い、自らと全世界も愛しむよう願う。そして、頭痛など種々の病気のほか、25 の恐怖、32 の刑罰、96 の病気、16 の厄災が消えてなくなるよう願う。經題の “cakka” とは仏の法輪を意味するものと考えられる。

この護呪經には、“sātru” という語が計 10 箇所見られる。「敵」の意で用いて

いるのであるが、これは三蔵のパーリ語にはない語である。三蔵のパーリ語においては通常、「敵」は“sattu”と綴られる。“satru”というのは、サンスクリット語の“śatru”から摂取されたものであろう。A.D.14c 初め頃のミャンマー・ピンヤ朝期に著されたと伝えられる *Lokaṇīti* の第 18 偈に“satru”という語が見られるが、筆者は、それ以外のパーリ語文献における用例を寡聞にして知らない。“satru”という語の使用はかなり限定されるように思う。故に、この護呪経が撰述された時代や地域を推定するための手掛かりの 1 つになるかもしれない。

3 つ目の Parimittajāla-s^o であるが、経題の意味は不詳である。池田正隆はこの経題を「全友網経」と訳しているが〔池田 1972a, p.141〕、パーリの文法・語彙という観点からの解釈根拠や、ミャンマーの nissaya 文献における語釈の例などが示されておらず、筆者には腑に落ちない。

また、この護呪経の *SParit* における本文は実に難解である。附録部にミャンマー語の nissaya (時代不詳) が収められているが、これを参照しなければ文意を掴むことが出来ない⁽²²⁾。また、nissaya を見ると、*SParit* の p.247 に示されているパーリ本文中にはない語が被註釈語句として示されている。これらを本文に戻すと、文意がかなり取り易くなる。この p.247 に示される本文は、損耗を被ったテキストであると考える。

nissaya を参考にしつつ、この護呪経の概要を述べると、最初に「釈尊が王舎城の靈鷲山に住していた時、そこに様々な天夜叉 (deva-yakkha) も住まっていた。天夜叉たちは、三宝が無量 (appameyya) であると知り、また、恐怖を寂滅している Mahāmoggallāna を恐れた。そこかしこに住まう無足者・二足者・四足者・多足者は、天夜叉らによって足・腿・眼・口・舌に障害をなされたが、〔三宝と Mahāmoggallāna の威力によって〕今や斯様になさなくなった」と述べて、その後、三宝への帰依とその威力による加護、“parimittajāla”の威光による一切の厄災・敵の消滅を祈願する文章が続いている。

前半の靈鷲山云々の話が Parimittajāla-s^o として伝えられていた元来の部分であり、祈願文から成る後半は後に付加されたもののようにも見える。

この護呪経にも“satru”の語が 1 箇所見られる。経題中の“parimitta”という語も含めて、ここには見慣れないパーリ語の単語が幾つか見られる。八方位を“pubba” (東)、“aggi” (東南)、“dakkhiṇa” (南)、“naratima” (南西)、“pacchima” (西)、“pārappa” (北西)、“uttara” (北)、“esanna” (北東) と表現し、足等の障害を“pāda-andha”、“ūru-andha”、“cakkhu-andha”、“mukha-andha”、“jivhā-andha”と表現し

ている。また、三宝を「全世界の母・父」(sakalalokadhātu-mātāpitu-) と述べており、思想的に特異なものとして指摘出来るであろう。これらのことは、この護呪経が撰述された時代や地域を推定するための手掛かりとなし得るかもしれない。

本編におけるこの3つの「疑経」については、*SParit* の原初テキストが編まれた A.D.1948-49 年よりも前に、ミャンマーで大威力のある“paritta”として広く読誦されていたことと推定されるが、具体的に何時頃からミャンマーにおいて読誦され始めたのかは不明である。

5. むすび

最後に、筆者は最近興味深い文章を目にしたので、ここでこれを紹介し、本稿の「むすび」としたい。

興味深い文章とは、チェコ人の *Saraṇa* という名の比丘が刊行しているニュースレター *New Pilgrim* (※ミャンマー語・英語混淆) の 2016 年 12 月 6 日号の中に掲載された“*Parimittajāla Sutta—A Non-Canonical Protective Chanting*”と題する記事⁽²³⁾にあったものである。

この記事は、先述来の3つの「疑経」のうち *Parimittajāla-sutta* について論じたものである。

そこでは、まず初めに、この護呪経が三蔵のどこにも見られないが、*SParit* の中に見られるとし、〈公式なビルマの僧院カリキュラムに従う沙弥・比丘らが、他の諸朗誦に加えて、しばしば暗唱する〉と述べる。

Saraṇa 比丘は、この護呪経はシンハラ護呪経集成にも見られないとも言う。そして、この経の歴史について *Vajirapāṇibhivamsa* 長老⁽²⁴⁾と交わした議論を紹介している。

その議論の中で、同長老は、〈ビルマがタイとの戦争の最中にあった時、ビルマ人たちは、タイ人らがどのように彼らの護呪経を読誦しているのかを見て、彼らのテキストに霊験を感じた。ビルマ人たちは、それらのテキストを自ら写し取った〉云々と説明した、という。そして、*Parimittajāla-s*[°] がどのパーリ聖典ともその内容の語句において矛盾しないように思うということ、および冒頭に「序分」が付されていることを考慮する必要があるということ述べた、という (p.5)。

Saraṇa 比丘は、もしこの経が真正 (*authentic*) であるならば何故に主要なパーリ聖典に含まれていないのか、と問うた。これに対し、*Vajirapāṇibhivamsa* 師

は、Āṭṇāṭiya-sutta のことを例示して、Parimittajāla-s[°] は何らかの長い経を在家者が憶持し易いよう調整してつくられた“*devotional version*”であると推測する、と答えたそうである（かなり無理のある弁解と思えるが）。

Vajirapāṇibhivamsa 長老は、Saraṇa 比丘に、〈これは公の諸行事には読誦されず、僧侶たちが好む読誦でもない。多くの学識ある僧侶らは事実その読誦を拒絶しており、弟子たちがそれを憶持するのをすすめない、と私は聞き知っている。併しながら、篤信の在家信徒が広く読誦している〉(p.5) とも述べたと言う。長老は、先の言にあった如く、Parimittajāla-s[°] の正統性を否定しないのであるが、ミャンマーの比丘たちの中には、この護呪経の読誦を否定する者も随分いるようである。このことは、政府による正典化の方向性とは逆に、自らの見識により「外典」と見做すミャンマー比丘もいるということを示唆する。

ところで、この Parimittajāla-s[°] を「正典」と見做し得るか否かの議論はひとまず措くとして、これをタイから摂取したものであるとする点は実に興味深い。前に述べた Uppātasanti の例があるので、この護呪経がタイの何処かでつくられてミャンマーに伝わったということは、決して考えられなくはないであろう。

筆者がこれまでに見聞したタイのパーリ語呪文類（※パーリ・タイ混淆またはタイ語訛のパーリ語も含む）の中には、“*satru*”という語形の語が含まれているものが幾つかあった。例えば、トンブリー朝のタークシン大王に対する供養文（คำบูชาสมเด็จพระเจ้าตากสินมหาราช）には、“*สัพพะศัตรู วินาสสันติ*” (*sabba-satrū vināssanti*) という句が含まれている。また、かつてはタイでも読誦されていたという *Mahādibbamanta* には、“*sabba-sattū vidhamsetu*”という句が1箇所 [MDM. v.13] あるにはあるのであるが、“*sabba-satrū vidhamsetu*”が6箇所 [MDM. v.13,24,30,89,90,106] も見られる。斯様なことから、“*satru*”を含む Parimittajāla-s[°] がタイから伝わったとする説については、余計に然もありなんと思える。ただし、Peter Skilling は、本編の3つの「疑経」について、タイでは知られていないと述べている [Skilling 1992.p.123 footnote 2-4] ⁽²⁵⁾ ので、タイからの伝来と断定するには、更に丹念に諸典籍・諸史料を渉猟しつつ、慎重に検討しなければならない。タム文字（ラーン・ナー及びラオ）やクメール文字で書かれたタイの貝葉写本の中に、これらの「疑経」が見つかれば、タイ伝来説はかなり信憑性を帯びてくるであろう。後考に俟ちたい。

本稿に使用した略表記

PTS : the Pali Text Society B^c : ミャンマー第 6 回結集版

参考・参考文献と略号

- Aung-Thwin2012. : Michael Aung-Thwin & Maitrii Aung-Thwin. *A History of Myanmar Since Ancient Times, Traditions and Transformations*. London: Reaktion Books Ltd, 2012.
- CBMW. : *Catalogue Of the Burmese-Pāli and the Burmese Manuscripts in the Library of the Wellcome Institute for the History Of Medicine*. Prepared by William Pruitt & Roger Bischoff. London: The Wellcome Trust Publishing Department, 1998.
- HLGB-1. : Department for the Promotion and Propagation of the Sāsana. *How to Live as a Good Buddhist*. 2 vols. Trans. U Han Htay & U Chit Tin. Yangon: DPPS, 2002. Vol.1
- Kyaw Zaw Win. : Kyaw Zaw Win. 'A History of the Burma Socialist Party(1930-1964).' *University of Wollongong Theses Collection*, 2008. (<http://ro.uow.edu.au/theses/106/>)
- ※これは Kyaw Zaw Win が豪州ウーロンゴン大学に提出した Ph.D. 論文である。
- MDM. : Padmanabh S. Jaini. 'Mahādibbamanta: A Paritta Manuscript from Cambodia.' *Collected Papers on Buddhist Studies*. Edited by Padmanabh S. Jaini. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers Private Limited, 2001. pp.503-526(Chapter 27)
- ※元は *The Bulletin of the School of Oriental and African Studies* Vol.28, part 1, 1965. 61-80。
- မဟာဓမ္မသ ဩ 1956. : မဟာဓမ္မသ ဩ .သာသနာလ ကာရဇာတိဇ် . Yangon : ဟံသာဝတီပိဋကတ်ပုံနှိပ်တိုက် . (※『ターダナーリンガーヤ・サーダナ』の原典)
- PLB. : M.H.Bode. *The Pali Literature of Burma*. Rangoon : Burma Research Society, 1965.
- RTPL. : *Analysis of the Pali Canon and A Reference Table of Pali Literature*. Edited by Russell Webb & Compiled by Bhikkhu Nyanatusita. Kandy: Buddhist Publication Society Inc., 2011.
- ※*Analysis of the Pali Canon* を Russell Webb が編纂し、*A Reference Table of Pali Literature* を Bhikkhu Nyanatusita が編輯した。
- Skilling1992. : Peter Skilling. 'The Rakṣā Literature of the Śrāvakayāna.' *Journal of Pali Text Society* Vol.XVI, 1992. 109-182
- Skilling2009. : Peter Skilling. 'Pieces in the Puzzle: Sanskrit Literature in pre-modern Siam.' *Buddhism and Buddhist Literature of South-East Asia*. Edited by Claudio Cicuzza. Bangkok: Fragil Palm Leaves Foundation, Lumbini International research Institute, 2009. 22-45
- Smith1965. : Donald Eugene Smith. *Religion and Politics in Burma*. Princeton Legacy Library. Princeton: Princeton Univ Press, 1965.
- SMN. : บุญเกิด วรรณศาสตร์. *สาวกมณฑลเมืองเหนือ ฉบับสมบูรณ์*. Chiangmai : จัดจำหน่าย และพิมพ์ที่ , B.E.2537
- 生野 1969. : 生野善応「ビルマの仏教」(山本達郎編『東南アジアの宗教と政治』、財団法人日本国際問題研究所、1969 年 pp.140-172)
- 生野 1980. : 生野善應『ビルマ上座部仏教史』、山喜房佛書林、1980 年
- 生野 1995. : 生野善應『ビルマ仏教—その実態と修行』、大蔵出版、1995 年(新装版 1 刷)
- 池田 1972a. : 池田正隆「ビルマの説誦用仏教護呪經典集 2 種」『鹿児島大学史録』第 5 号(1972 年 9 月) pp.135-144
- 池田 1972b. : 池田正隆「ビルマの護呪經典序偈—パリラッタパーリ・ニダーナとその試訳」『大谷中・

高等学校研究紀要』第10号(1972年) pp.1-13

池田 1993: 池田正隆「ウッパータサントー (UPPĀTASANTĪ) —ビルマ版護呪經典のローマナイズとその試訳」『大谷中・高等学校研究紀要』第30号(1993年) pp.1-43

池田 1995: 池田正隆『ビルマ仏教—その歴史と儀礼・信仰』、法蔵館、2000年(初版第3刷、1995年初版第1刷) pp.149-171

池田 1997: 池田正隆「大谷大学図書館所蔵パーリ語貝葉写本の文献的研究 5. ビルマ文字版三蔵註釈文献—ṭīkā (復註) の一部と ganthantara (諸雜典籍)、nissaya (逐語訳)」『真宗総合研究所研究紀要』第16号(1997年) pp.149-171

池田 2007: 池田正隆『ミャンマー上座仏教史伝『タータナー・リンガーヤ・サーダン』を読む』、法蔵館、2007年

ウェーブッラ 1978: ウ・ウェーブッラ『南方仏教基本聖典』、中山書房仏書林、2000年(第5刷1978年第1刷)

大野 1969: 大野徹「ビルマにおけるカレン民族の独立闘争史(その1)」『東南アジア研究』第7巻第3号(1969年12月) pp.363-390

香川 1969: 香川徹男「ビルマの近代化における仏教について」『印度学仏教学研究』第17巻第2号(1969年3月)

佐々木 1949: 佐々木教悟「南伝仏教の一様相—シャム仏教に於ける誦咒」『大谷学報』第28巻第2号(1949年) pp.42-60

土佐 2000: 土佐桂子『ビルマのウェイザー信仰』、勁草書房、2000年

原田 2009: 原田正美「第9章 近現代ビルマ(ミャンマー)における「経典仏教」の変遷—〈実践〉〈制度〉〈境域〉の視点から」(林行夫編『〈境域〉の宗教実践—大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』、京都大学学術出版会、2009年 pp.450-506)

東元 1970: 東元慶喜編『パーリ語仏教常用聖典解説』、駒沢大学パーリ文学研究室発行、丸善発売、1970年(再々版、1950年初版)

古山 2014: 古山健一「ミャンマー撰述の Paritta-ṭīkā について」『パーリ学仏教文化学』第28号(2014年) pp.69-86

M-Edict: မြန်မာ-အင်္ဂလိပ် အဘိဓာန်, Myanmar-English Dictionary. Yangon: Department of the Myanmar Language Commission, Ministry of Education, Union of Myanmar, 2007(7th ed.)

ビ辞典.: 大野徹『ビルマ(ミャンマー)語辞典』、大学書林、2000年

註

- (1) 表題は、ミャンマー語で“သီရိမင်္ဂလာပရိတ်တော်”(ティ—リミンガラ—パイ—エッドー)とある。表題を構成する語のうち“သီရိ”(＜P.siri / sirī)、“မင်္ဂလာ”(＜P.maṅgala)、“ပရိတ်”(＜P.paritta)は、パーリ語からの借用語に類するミャンマー語の語彙である。末尾にある“တော်”は、尊貴なものであることを表すための接尾辞であり、“ပရိတ်တော်”で「護呪御経」や「護呪聖典」といった意味になる。全体では、例えば「勝吉祥護呪聖典」などと訳せるであろう。池田正隆は表題を「吉祥護呪経」と訳している[池田 1997.p.167]。

本稿で使用したミャンマー宗教省刊の本では、表題の下に括弧書きの副題が付されており、“သီရိမင်္ဂလာပရိတ္တပိဋ”とある。これはミャンマー文字により表記したパーリ語であり、“Sirīmaṅgala-

- た世界衰退期において、「刀剣による中間の劫 (sattha-antara-kappa)」と呼ばれる末世的状況が現出し、7 日のあいだ人々は刀を手にして互いを野獣と見做して殺し合うのであるという [Pāthikavagga-pāḷi B^e p.60]。また、同経の註釈によれば、この人寿 10 歳の時には、「刀剣による中間の劫」のみならず、「飢饉による中間の劫 (dubbhikkha-antara-kappa)」と「病気による中間の劫 (roga-antara-kappa)」も起こるとされ、貪欲の盛んな人には「飢饉による中間の劫」が、愚痴の盛んな人には「病気による中間の劫」が、瞋恚の盛んな人には「刀剣による中間の劫」が現出するとしている [Pāthikavagga-aṭṭhakathā B^e p.38]。ここに言う「中間の劫 (antara-kappa)」とは、世界の完全壊滅期である「壊劫 (samvatta-kappa)」には到らない世界の消滅を意味する。即ち、世界存続期である「住劫 (vivatta-kappa)」の中間に起こる劫の滅亡である [cf. Pāthikavagga-aṭṭhakathā B^e p.38; Pāthikavagga-ṭīkā B^e p.31; Visuddhimagga-mahāṭīkā B^e vol.2, p.24]。
- (9) 池田正隆は、〈この書物は、出版の前年 1948 年にヘンザダ町のウ・ミヤをはじめ、当時の首相 ウ・ヌーなど僧侶以外の在家仏教界の要人 10 名が発起人となって、Thirimiṅgala Paritdaw Apwe なる組織をつくり、仏典結集に参加する三蔵に精通した大長老達により、効力のある有名なパリッタを選び出して口誦してもらい、それらを…〉[池田 1972a. pp.139-140] と述べている。宗教省版 SParit が語る経緯とは異なるように思うが、ThP 版には斯様に述べられていたのであろうか。
- (10) 「因縁」は 9 節から成り、①護呪聖典協會設立の経緯、②発起人諸氏、③輯録した護呪経 31 経リスト、④曜日ごとに唱えるべき護呪経の詳細、⑤日々の読誦において唱える護呪経の順番 (6 項、(2) → (3) → (12) → (4) → その曜日の護呪経 → (46) の順)、⑥護呪の読誦者の心得 (3 項)、⑦聴聞者の心得 (3 項)、⑧激励の言葉、⑨「第 3 版」についての付記が述べられている。このうち④～⑧は、ミャンマーにおける護呪経読誦実践の考え方を理解するのに重要である。
- (11) ここに示される「善神招請の 2 文」とは、“(ka) cha te satta sahaṣṣā ca, pañcasatā ca kumbhiro. mahārājā ca tamputtā, gandhabbā ceva dāsakā. (kha) sakkādayo ca satṭhikā, samārakā ca asurā. modamāno āgametha, amhākaṃ samitinnam ṭhānam. tumhākaṃ pi paṇṇākāram, bhava rakkhetha bho sadā.” というものである。なお、ミャンマー語の語釈における被註釈語を繋ぎ合わせて比較してみると、若干の相違が見られる。
- (12) “ဝဋ်ခွေ” には① mark off or cordon off an area と② recite mantras to prevent evil spirits from entering a certain area の 2 義があると言う [M-Edict. p.121b]。ある場所に非常線や防護線を張ることを意味する語であるが、一定の区域に邪悪な霊を入れないようにすることについても用いる。今は「邪霊遮止」と訳しておいた。この「邪霊遮止の諸偈」とは、東北、東、東南、南、南西、西、西北、北、東北、上、下の 11 方位 (実質的には 10 方位) に防護線を張るための偈文であり、各方位ごとに 1 偈を唱えるので計 11 偈が示されている。いずれの偈文も、“sabbe buddhāppattā, paccekānañca yā/yam/yo ... (m.,sg.,nom.), arahantānañca tejena rakkham bandhāmi sabbaso.” という文形式であり、方位ごとに “...” の部分の語が変えられている。一切諸仏、諸独覺、諸阿羅漢の力を念じて、それによって 11 方位に防護線を張るのである。なお、池田正隆は「結界諸偈」と訳している [池田 1972. p.142]。
- この 11 偈は、Mahāparitta に輯録されている Pubbaṅga-sutta (晨朝経) の第 7 偈の一部を各々改変したものと考えられる。因みに、同経の第 7 偈は、タイ北部の読誦経集の 1 つである SMN. には、Devatā-uyyojana-gāthā の最後の偈としてあるのが見える (p.77)。
- (13) 「Jayanto」偈で始まり “saha sabbehi nātibhi” で終わる諸偈」とは、Mahāparitta に輯録されている

Pubbaṅga-sutta (晨朝經) の第 13 偈～第 17 偈と同一の諸偈である。第 13 偈と第 14 偈は三蔵に典拠を求めることが出来ないが、第 15 偈以降は Aṅguttara-nikāya に収録の Pubbaṅga-sutta の偈文に相当する [Tikanipāṭa-pāḷi B^c p.298]。

なお、この「Jayanto」偈で始まり「saha sabbehi nātibhi」で終わる諸偈」は、SMN. の Jayaparitra (ขอพริตร = Jayaparitta) の最初の 1 偈を除いた残りに概ね一致する [cf. SMN. pp.71-72]。

- (14) 「大地勝利真言」(pathavījaya-manta) は “om...pathāvījayasabbam, aneka-antarāyikam, jayam pacceka-buddhā ca, jayam pari mahesayo.” を初めとする計 14 偈から成る真言 (๑๕๕ < P.manta) であり、三蔵には典拠を求めることが出来ない。

因みに、Jātaka-aṭṭhakathā における No.241 「サッパダータ本生話」に、過去世の釈尊 (菩薩) が “pathavījaya-manta” を知っていた、という記述が見られる (B^c vol.2, p.222)。そこでは、その真言は示されていないので比較ができないが、SParit のそれとは直接的な関係はないように思われる。本生話の中では、“pathavījaya-manta” とは “āvatta-manta” (誘惑の真言) であり、濫りに他人に聴かせることは出来ないもの、と述べられている。

- (15) ミャンマーにおいて仏像開眼 (abhiseka : 灌頂) の際に (4)、(5)、(6)、(7)、(10) = (38)、(39) を唱える由縁については、ウェーブツラ 1978. の解説 (p.180) が簡便で分かりやすい。因みに、(4) は Dhammapada B^c vv.153-154 に、(5)・(6)・(7) は Vinaya の Mahāvagga (大品) の Bodhi-kathā [B^c pp.1-2] に、(10) = (38) は Paṭṭhāna (『発趣論』) おける Paccaya-uddesa (縁略説) に、(39) は同論書の Paccaya-niddesa (縁広説) に、各々典拠を求めることが出来る。

- (16) Jaini がカンボジアのクメール字写本からローマナイズしたテキストの vv.6-9 は、大地勝利真言における vv.2-5 にほぼ一致する [cf. MDM.pp.507ff.] なお、Jaini は、Mahādibbamanta はカンボジア起源であると述べている。佐々木教悟は、ラオスのヴィエンチャンで編纂されたとするタイの所伝を紹介している [佐々木 1949. pp.56-57]。かつてタイでは戦争の前に Mahādibbamanta が唱えられ、ラーマ 5 世の時代に中国のホー族鎮定のため出征したタイ軍がこれを読誦したと言う [cf. 佐々木 1949. p.56 : Skilling 2009. p.35]

- (17) 偈文 : puññabhāgamimaṃ caññaṃ, samaṃ dadāma kārītaṃ. anumodantu taṃ sabbe, medinī thātu sakkhike.

- (18) 池田正隆は、ThP 版に輯録の 31 経のうち、Mahāparitta に相当する 11 経を除いた護呪經の、パーリ三蔵における典拠について、当時調べられた限りにおいてこれを示しているが、Abhiṅga-sutta、Chadisāpāla-s^o、Cakkaparitta-s^o、Parimittajāla-s^o、Uppātasanti に関しては典拠を指摘しておらず、〈…その確実な典拠を時間的な関係もあり、遂に調査して、つきとめるところまで至り得なかった〉 [池田 1972. p.142] と述べている。Dhāraṇa-paritta のことには言及していない。池田がその後調査を継続したのか否かは、筆者 (古山) には不明である。Abhiṅga-s^o については、既述の如く、Aṅguttara-nikāya に典拠がある。残りの 4 経については如何かと言うと、SParit の脚注には、出典に関する言及がまったくなされていない。筆者も三蔵とその aṭṭhakathā 文献を範囲として調べてみたが、その出所と思しきものは見出すことが出来なかった。故に、SParit の本編に輯録される 31 経のうち、目下のところ 4 経が典拠不詳ということになる。

- (19) この両書における Uppātasanti の言及位置から察するに、少なくともこの 2 つの史書を書いた著者の認識・理解においては、A.D.16c 頃の作品と見做していたのではないと思われる。

- (20) nissaya によると、最初の “illi” は「良い夢を見られるはずだ」、次の “milli” は「悪い夢を見ないはずだ」、その次の “tilli” は「良い魂消る兆候を見るはずだ」、最後の “milli” は「悪い魂消る兆候

を見ないはずだ」の意であるとのことである (p.375)。解釈の根拠は示されていないので、何故に斯様に読めるのか分からない。参考までに、nissaya に依拠した英訳は、前半の “illi milli” は “*The devotees can sleep well with good dreams, but not with bad dreams.*” で、後半の “tilli milli” は “*They can see good omen, but they have not to see bad omen.*”、である [HLGB-1. p.199]。

ところで、サンスクリット文 Ārya-mahā-māyūrī-vidyā-rājñī (『孔雀明王經』) の「心呪」の中には、“...ili mitti, tili mitti...” という部分がある (cf. 田久保周誉『梵文孔雀明王經』、山喜房佛書林、1972 年 p.9)。大塚伸夫は、この呪句の終わりに “drāmiḍā mantrapadāḥ” とあることから、ドラヴィダ語系の呪文であると述べている (cf. 大塚伸夫『十一面觀世音神呪經』の形成と展開について『高野山大学密教文化研究所紀要』第 25 号、2012 年 p.152 注 19)。Dhāraṇa-paritta における “illi milli tili milli” なる真言は、このドラヴィダ語系の呪句に淵源を持つのではないかと思う。後考に俟ちたい。

- (21) ここではその仔細を逐一述べることは割愛するが、第 1 段には、“buddhānaṃ jīvitaṃ na sakkā kenaci antarāyo kātum, tathā me hotu.” とある。文末の “tathā me hotu” を除いた前方の文は *Vinaya-aṭṭhakathā* に見られ [Pārājikakāṇḍa-aṭṭhakathā B^c vol.1, p.147]。続く第 2 段目の初めにある “atitame buddhassa” 云々の文章は、*Udāna-aṭṭhakathā* (B^c p.120) や *Itivuttaka-aṭṭhakathā* (B^c p.118) 等に同文が見られる (大元は小部 *Paṭisambhidāmagga* の言葉である)。続く文章は *Vibhaṅga-mūlaṭṭhā* (B^c p.2) の中に確認される。
- (22) ミャンマー宗教省の仏教布教促進局 (D.P.P.S) が A.D.2002 年に刊行した *How to Live as a Good Buddhist* (2 巻) という英文仏教書の Vol.1 には、Chapter13 に朗誦用のバーリ護呪文が 9 種挙げられており、それらを朗誦すれば、善のエネルギーを得て、悪が入り込まず、諸々の危険から逃れられる、と述べている。その 9 種の護呪文の中に Parimittajāla-sutta と Dhāraṇa-paritta の英訳が載せられている [HLGB-1. pp.189-191]。どちらも nissaya を参考にした英訳のようである。これらの護呪文の文意を理解するのに参考になる。
- (23) <https://archive.org/stream/NewPilgrim160223/161206/Newpilgrim161206#page/n1/mode/2up> (2018 年 2 月 1 日閲覧)。当該記事は pp.5-7 にある。
- (24) Sayadaw U Vajirapāṇibhivamsa。人物の詳細は不明である。ヤンゴンのパハン区にある Maha Withudayon Shwegyin Taikthi 僧院に住した学僧比丘のことか？。
- (25) 因みに Peter Skilling は、Dhāraṇa-paritta については、A.D.1989 年に編まれたタイの護呪経集成本に取り込まれたことを指摘して、〈テキストは、見たところ、最近ビルマからシャムにもたらされた〉と述べている [Skilling1992. p.123 footnote1]。

〈キーワード〉 *Sirīmaṅgala-paritta*, *Uppātasanti*, *Dhāraṇa-paritta*, *Parimittajāla-sutta*, *Mahāparitta*